



右京区 体験学習会を実施 今後も拡大

右京支部 平井敏

京都で公費助成の会が20年9月に発足され、直後に右京区の会を立ち上げ宣伝・署名活動、学習会を開催してきました。

22年9月に右京区の会として第1回目の学習会を開きました。講師には福祉保育労京都聴言センター分会の好川賢一さんを迎え「知っておきたい難聴と補聴器のこと」と題してわかり易い話をされ、多くの質問が出されました。感想で「初めて知ることが多かったです。色々納得出来ました。」と今後も開いてほしいという希望がだされました。



右京支部の学習会の風景 受信機（補聴器）を10人がつけて体験（右京支部学習会）

202

老人クラブとも共同して請願採択

向日支部 北林重男

支部は2021年9月に「補聴器についての学習会」を行い、支部の運動にすることを6月の総会で決定した。2022年9月の役員会で議会請願に取り組むこと決め、2023年3月市議会に『「難聴者の補聴器購入に公的補助制度を創設しよう」

国に対する意見書の提出を願う請願』を団体請願として提出することを決めた。2月初旬から各団体へ請願提出の賛同申し入れを行い、役員の粘り強い活動で向日市老人クラブ連合会をはじめ20団体から賛同を得て、2月21日の議会初日に各会派に6人が請願賛同の申し入れを行った。請願を審査する委員会が3月9日に開かれ、12人が委員会を傍聴し支部長が請願の趣旨説明を行い、委員会では賛成多数で採択された。17日の最終本会議には6人が議会傍聴に参加、請願が採決され賛成18、反対1（維新）と圧倒的多数で採択された。

福知山支部での助成制度の取組と現状

福知山支部 金澤徹

現在、補聴器購入助成制度は障害者手帳所持者のみ適応され、自治体独自の創設は財政問題などから極めて難しい状況と言えます。福知山支部では直ぐに補聴器購入制度を福知山市に求めるのではなく、共産党市議会員団とも協議して、最初に国への意見書提出を求め、次に京都府の助成制度創設、そして市の上乗せ助成を求めることにしました。

2年前に加齢性難聴者の補聴器購入の意見書が不採択となり、その事を踏まえ、「加齢性」という言葉を使わず、再度、昨年12月議会で「中等度以上の難聴者の補聴器購入に対する公的補助制度の実施を求める意見書提出の請願」を行い、全会派賛成で採択されました。リベンジの出来事です。私達も今回の提出にあたり、緊急署名に取り組み、署名を聴覚言語障害センターや市老連に持ち込み、署名に協力してもらいました。また、

京田辺市への要請署名活動を開始

綴喜支部 中村誠一

昨年末、京田辺市の社会保険推進協議会（社保協）に年金者組合として提起して社保協として京田辺市へ署名運動を取り組むことになりました。「加齢性難聴者の補聴器購入への公的補助制度の創設を求める署名」のあて先は京田辺市長 上村崇様 です。

要請事項としては、①「加齢性難聴者の補聴器購入に公的補助制度を創設する」ように国に要望すること。②加齢性難聴者の補聴器購入に京田辺市独自の補助・支援事業を実施すること。の2項目です。

署名は社保協加盟8団体で取り生まれ、5月29日、1085筆を京田辺市に提出し、このことについての懇談を持つように申し入れています。



JR宇治駅前での宣伝行動

宇治市は、人口19万あまりの京都府、二番目の市です。久御山町は人口1.7万人の町です。宇治、久御山町ともに高齢人口が30%以上を占めるようになってきました。年

行政への要請活動

支部紹介⑭ 宇治久御山支部

行政へ要望活動 力入れて 公民館・交通・補聴器要求など活発に申し入れ

11サークルが元気に活動

年金者組合員は宇治市で0.75%、久御山町で0.3% (65歳以上人口比) となっていています。現在、最高時の組合員から30人ほど減っていて「仲間作り」に取り組んでいるところ

支部の取り組みでは、昨年末から今年にかけて、宇治市、久御山町に対して「市政要望書」「町政要望書」を出してそれぞれ懇談をしました。宇治市には特に「公民館廃止」に関する公共施設の廃止・統合について強力で申し入れを行いました。また公共交通機関、加齢性難聴に対する補聴器購入の補助についても申し入れを行いました。久御山には、公共交通の問題などの申し入れをしています。

サークル・班・共済

宇治久御山支部には、サークルが11あります。

他に準備中も映画、麻雀などがありますが、比較的参加者が多いのは「歩きませんか」で近隣の名所・旧跡などを訪ねるのが人気です。サークルの行事に参加することで組合加入につながることも多いの



メーデーで行進する支部組合員

で、この活動を強めて、地域の組合「班」の強化につなげられたらと思っています。「共済」の取り組みも超高齢化進行のもと大切な分野です。担当者の配置に苦労はありますが強めていくつもりです。2019年12月以来の新型コロナの流行で「地域班」「支部レベル」の行事がほとんど無しの状態となり、これから各種の行事を再開する必要があります。今年のメーデーは、3年ぶりに集会・デモも取り組まれ支部でも70名以上が参加しました。しかし「寄る年波」には勝てず、デモには参加出来ない方もかなりおられたのが実態です。

年金支給日宣伝は、不定期ですが宇治・久御山の様々な場所で行って来ました。定期にやればいいのですが、今後の検討課題です。

ワンショット

日本人とは昔から深い関係があるキジ

日本の国鳥

キジ目キジ科



繁殖期になり、ハート型の赤い顔になったキジの雄。日本の国鳥。「朝キジが鳴けば雨、地震が近づけば大声で鳴く」といった予知能力まで与えられていると言われ、日本人とは昔から深いつながりを持っている。桃太郎の話をはじめ、多くのことわざや俳句などで使われるなど、日本文化とは切っても切れない鳥と言えます。

「雉も鳴かずば撃たれまい」とは、余計な事を言っ

て自ら不利益を被ることをたとえたもの、「焼け野の雉子、夜の鶴」とは親が子を思う気持ちを例えたことわざ。昔話の「桃太郎」では、サル、犬とともに登場する動物として有名で、キジは日本人にとって身近な野鳥です。

昔から狩猟の対象とされ、日本人の食料としても重宝されてきた。桂川にもよく現れて繁殖していたが、河川工事などで生存数が極端に減少、よく鳴き声を聞いたが、最近ではあまり聞かなくなった。(浜)

京都年金者文芸



俳句

九十七歳の友より新茶届きけり
故郷は薄羽蛸とぶ頃ぞ

佐藤 総子
中川 美穂

以上響言年金者しんぶん

丹波路をのらりくらりの山桜
蕨取り屈みて伸びて二歩散歩

野末たけのり
中村美沙子

以上宇治・久御山ねんきん

鯉幟下にぎやかにわらべうた
マスク取りはじた連休人の波
春なのに老若男女の黒づくめ

山本 拓治
陽子
美夜生

以上年輪西京

吹き流し峡の川辺の競い合い
鯉のぼり思い出ひらり風ひらり

荒田 義枝
野尻 きみ

以上北桑田支部

をちここに天道花立て元氣村
柏餅老女の大口無邪気なり
鉄先のみみずを土に戻しけり

康弘
紀代子
富美

以上舞鶴年金者しんぶん

もらひ来し子猫に名付けソクラテス
村中に続く植田の大安堵
にぎやかに手話でさよなら京の春

竹中 龍平
藤井 節子
宮下 広美

以上これからだ(福知山)

年金の仲間と会えて夫泣く
国会で悪法次つぎ審議入り

堀 千恵子
三宅まさ子

以上ねんきん城陽

薫風の円山公園ひびく平和こそ
薫る風守れ憲法八十路の足
春眠や夢に起こされ又眠る

藤本 貞女
山田 フサ
奥原千代子

以上ひがしやま(東山)

こどもの日子供に返る母見舞ふ
大楠や土塁守りて若葉風

広田浩三(下京)
谷口久子(右京)



短歌

花散らしこぶしの木々も新芽立ち
新入生の香に満つ正門
勤めから帰るなりいつも来てくれる
「今日は顔色いいですよ。」と嫁
それなりの労働すれど赤字なる

谷 喜久子

我が百姓の春の憂鬱
以上船井丹雲の会

西浦小百合
俣野 右内

ふり向けば路傍の石のひとかけら
あらぐさのごと心枯れさじ
『青い空は』五十年余を歌い来し
戦後のずっと続くを願ひ

平林 英男
芦田 幸恵

以上宇治・久御山ねんきん

手を添えて温まりつ、飲むコーヒー
子孫曾孫思う朝のひととき
春の野のお店番かな紋白蝶
花から花へ行ったり来たり

山口 至江
野垣 幸子

以上舞鶴年金者しんぶん

雲の上にごぼれゐる朱き実を見つけ
とび出す幼裸足のまゝに
洛西の愛宕の山の溪深く
密やかに咲く九輪の花邑

山本三枝子
大橋 歳彦

「毒ダミ」は「矯める」の語からきたと言ふ
連休明けが摘みどきみたい
自肅とけ車窓より見る杜若
みどり葉の中すらりと清し

所川和美(綴喜)
小川民子(城陽)

以上年輪西京



川柳

新緑の愛犬はしゃぐ散歩道
山、走る新緑芽生き癒される

白夜
一美

署名まだ?核禁条約G7
九条に不戦を誓う世界の声
基地強靱化でも民避難所なし

千龍子(舞鶴)
辻善一(城陽)
木村博義(綴喜)

趣味の紹介



東山支部 今村フサ子さん



宇治久御山支部 平尾裕子さん

今なお現役カメラマン

『ドンが聞こえなかった人々』 1991年に出版

『視点』に公募

「こんな写真撮っています」と差し出してくださった数枚の写真にびっくり。年配の女性が虫食いだらけのキャベツを抱えて微笑んでいたりと、静ま

り返った村の道路をシニアカーで移動する後ろ姿だったりですが、どこかで見た記憶があります。「『視点』という公募展に出しています」と聞いて、友人に誘われて行った写真展で見たのだと思い出しました。モデルは奈良県の限界集落でひとり暮らしをされる89歳の母上です。「母の認知も進み、世話をするために京都と奈良山中を行ったり来たりする毎日」で、「支部の会議なんか出たこともない」。

30歳で独立

プロカメラマンの豆塚さんは高校生のころから写真に興

味を持ち、土門拳や英伸三に憧れておられました。写真撮影助手をやったり「落西ジャーナル」というミニコミ紙を作ったり、その後はデザイン事務所や民医連関係からも頼まれるようになって30歳で独立されます。そしてコマージュンルばかりでなく、世の中に残る本を出版したいと考えるようになりしました。

豆塚さんは当時、手話通訳者団体の機関紙に関わっていて、そのつながりで長崎の耳の不自由な人たち(ろうあ者)の被爆体験を知り、写真集『ドンが聞こえなかった人々』を作ります。これは日本語と

英語で書かれています。出版する1991年に「世界ろうあ者大会」が初めて日本(東京)で開催されることになっていて、参加者に読んでもらいたいという思いからでした。思いがけなく長崎県から補助金が出て大会に300冊を寄贈でき、関係者からとても喜ばれました。

仕事は旺盛に

その後は、ろうあ者の地域の運動家が素晴らしいのに、みんな年を取って亡くなっていく、記録を残したいと季刊紙『みみ』にレジェンドたちを紹介する連載を約10年、障害児・海くんとご家族の撮影を20年以上続けてこられました。今は、養護学校卒業後の専攻科で写真の授業もされています。子どもたちはカメラを持つことに初めは戸惑って

も、だんだん伸び伸びと動き出し、豆塚さんがびっくりするような作品ができることもあるそうです。

年金者組合とのお付き合いは約20年前、写真クラブの指導を頼まれたことがきっかけです。3〜4カ月に一度、合評会をします。豆塚さんは「老後は3つの作が必要! 体力作り、仲間作り、生きるテーマ作りの3つ。3つ同時にできるのが写真サークルに入ること」。でも最近は人数が減っているそうで、「今はなかなか仕事を辞められへん、生活が貧しくなっているように感じる」と話されます。

でも豆塚さんは旺盛に活動を続けておられます。「写真は、テーマを決めて深めていくことが必要です」。今は「大和」にこだわって撮影されて、次の展覧会が楽しみです。

(取材 矢吹美根子
西田美津子)



日本リアリズム写真集団「視点」
全国公募展での視点賞受賞作品



輝いて元気に

(まめつか たけし)
豆塚 猛さん (西京支部 68歳)



日本リアリズム写真集団「視点」
全国公募展での奨励賞受賞作品

